巻頭特集◎多肉植物の魅力鉢

Interview
4

荻野揺子

埼玉・久喜

「シャープモダンで格好良く」と「渋めのブロンズ色でアンティーク調に」2つをテーマに展開する鉢

美大時代に学んだ油絵の技法を転用し、土の素材感を生かした漆喰壁のようなテクスチャーや深みのあるマットで落ち着いたブロンズ風のアンティーク鉢を展開する荻野揺子さんにお話を伺った。

「シャープモダンで格好良く」テーマにした角鉢に植えたサボテン各種。小型のサボテン系は根が小さいので鉢の高さは必要ないが、適度な土の容量が入る程度に作っている(写真上・右)。

サボテンに合う鉢づくりが始まり

ふわふわ、とげとげ、にょろにょろ、まんまる。一鉢一鉢眺めていると、どれもこれも愛嬌満点。こちらは植物愛好歴30年になるという荻野さんが愛培しているサボテン類の一部。自宅にはサボテンに加え、エケベリア、アオエニウム、リトープスといった多肉植物とエアープランツなど、およそ50鉢を育てているという。

多肉ブームで市場では一部高値で取引されている植物もあるが、荻野さんは好きなサボテン類を中心に手頃な価格帯を選び、自作の鉢に植え育てている。

「植物によって根が縦長に伸びたり横に広がるなどタイプはさまざまですが、小型のサボテン系は根が小さいので土の容量だけ気をつけながら、サボテンに合う形、大きさにしています」

荻野さんが鉢を作り始めたのは4年前。最初は好きなサボテンを植え替えて楽しむのが目的だったが、現在講師を勤める岩槻陶芸教室で目にした本誌『陶遊174号』の多肉植物の鉢特集が転機になったという。

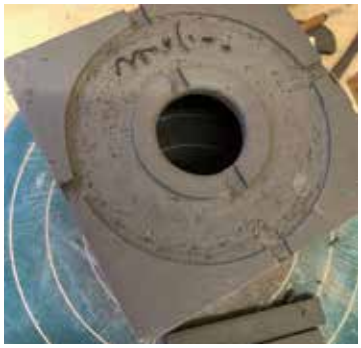
「鉢作家のセキグチタカヒトさんの記事を読んで、好きなサボテンとともに楽しみながら制作している関口さんにとても憧れ『私もいつか、こうなりたい!』と。つい最近イベントでご本人に

バリや引っ掻きで漆喰壁のように見立てたテクチャー。
上/Kassiシリーズ　黒泥角鉢　W11×H11㎝
下/Kassiシリーズ　白化粧角鉢　W9×H11㎝

eloa人気のKassiシリーズ

Kassiシリーズ　黒泥角鉢
全体W9×H9cm　内径7cm　内深6.5cm
素地：黒御影土
（写真提供：eloa）

Kassiシリーズ　黒泥角鉢
全体W9×H9cm　内径7cm　内深6.5cm
素地：黒御影土
（写真提供：eloa）



鉢孔Φ2～3センチ、水切りは2～4箇所を基本にしているが、鉢の大きさに応じて変えることも。見えない鉢底のデザインもちょっとした工夫を凝らしている。

最近は割れた木炭の断面（写真上）や棒状に細く裂いたタタラを貼り付けたり、波のようなうねりを表すなどテクチャーを研究し、変化種を増やしている。

Brassシリーズ　アンティークスタイル　W11×H10cm
内径9cm　内深7cm

左／マミラニア黄金司
右／エキノプシス　フォルモーサ

ブロンズやストーン調の丸高杯タイプ

黒泥丸高杯鉢　W9×H11cm
植物：エキノセレウス

作品名黒泥丸高杯鉢　W10×H10cm
鉢孔Φ2cm　内深8cm

お会いする機会があり、その事をお伝えました。かなり一方的でしたが（笑）」

鉢制作を本格化

「好きな植物とお酒に特化し、制作の軸を鉢と酒器に絞った」という関口さんに影響を受け、荻野さんも2020年頃から鉢の制作を本格化させる。当時作っていた2種類の鉢をインスタグラムで発信すると、それを見た業者から声がかかる。42～43ページで紹介する鉢専門のオンラインショップ『eloa』もその一店で、黒い角鉢の『kassi』シリーズはeloaでも人気の鉢だという。「シャープモダンで格好良く」をテーマに、黒泥土や黒御影土を素地に用い、タタラで成形する。美大時代に学んだ油絵の技法を転用し、側面には土の素材感を生かしながらペインティングナイフや包丁、金属工具などでテクスチャーをつけるなど、立体アートとして表現している。

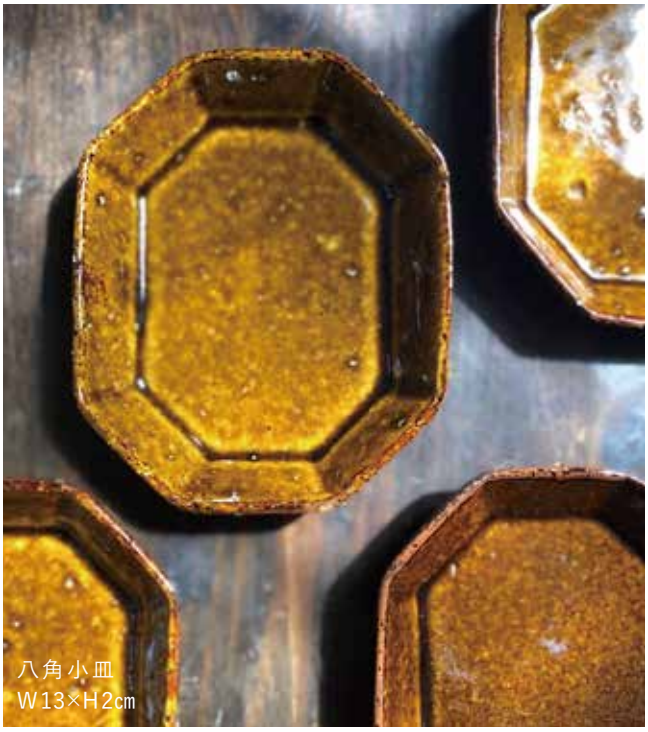
「好きな漆喰壁のコテ跡などをヒントに、ダイナミックな勢いとバランスを大切に『主張しすぎないデザイン、でもワンポイントがある』を意識しています」

また他の鉢よりも目に留まるよう足をやや高めに改良するなど、eloaの中村氏からのアドバイスも加えブラシュアップしてきたそうだ。色は極薄の透明釉を吹き付けた黒と、白化粧の

ドレープ長皿
W25×H3cm

ドレープ楕円皿
W21×H3.5cm

ドレープ高杯
W24×H3cm


八角小皿
W13×H2cm

白、金メタリック釉を施釉した3色を展開している。

またもう一つの赤土を素地にしたアンティーク調の丸高杯鉢は、ロクロで成形し、好きなアンティークの装飾品等を手本に、金属特有の明るいメタリックな色から焼成温度を少し調整し、彩度を落とした渋めのブロンズ色に仕上げている。古色感を出すことでよりグリーンが映えるという。

陶芸との出会い

現在制作の中心は鉢が占めている一方、食器や花器、小さいオブジェなども手がける。食器は鉢とは対極に女性を意識した曲線美や柔和さを取り入れたエレガントな形が多い。

荻野さんの成形方法はタタラとロクロが中心。作品によって型を応用することもある。15年間勤めた前職の県立の特別支援学校で美術教員として陶芸学習の指導で培ったという。授業では就労に必要な基礎知識や技能を生徒に身につけることが目的で、鋳込みやタタラ、型成形などで食器を作るのが主だったという。そうした中、土に触れるうちに自分の陶芸表現をしたいと思うようになる。当時陶芸を趣味に活動していた美術教員仲間の刺激も受け、2007年から本格的に陶芸を始める。

荻野揺子　（おぎの・ようこ）

さいたま市生まれ、久喜市在住。
武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画コース卒業。学生時代は抽象画・版画を専攻。1992年陶芸を始める。2017年10数年県立特別支援学校において美術教諭として陶芸の授業を担う。生産的製品を作りながら作品の制作に興味を持ち、2021年に本格的に陶芸に専念。関東圏クラフトマーケットでの出展を続ける。
2021年　陶芸教室縄文舎所属。
2021年　陶芸文化振興財団岩槻教室のスタッフを務める。

◎荻野揺子関連サイト

荻野揺子→ホームページ　荻野揺子→インスタグラム

◎鉢の取扱いショップ

eloa

eloa→オンラインショップ　eloa→インスタグラム

mana's farm

mana's farm→オンラインショップ　mana's farm→インスタグラム

ceramicalreaction（香港）

ceramic alreaction→オンラインショップ　ceramic alreaction→インスタグラム

◎器の取扱いショップ

家具の小松屋（栃木・栃木）

小松屋→ホームページ　小松屋→インスタグラム

◎イベント出展情報

3/21　みどりとまつり&greenfes（埼玉・北本）
3/25　bizarre farm Spring Fes（埼玉・吉見）
4/30　小松屋マルシェ（栃木・栃木）
5/27～28　フェルム・ド・フェスティバル（茨城・稲敷）

荻野さんの植物仲間「croppefarm」さん（写真提供）の多肉植物の箱庭作品。多肉植物やサボテンの寄せ植えに荻野さんのミニオブジェ（家、車）を一緒に飾りつけてジオラマ風にアレンジ。植物を育てる楽しさと自分の世界観を表現できる楽しさの両得で、近年はまる人が増加中とか。

croppefarm インスタグラム

クラフト市で知り合った植物関係者に頼まれ、最近は家や車のミニオブジェ（写真上・右上）を作る機会が増えてきたという。なかには1人で20、30個頼まれることも。エアープランツもアンティーク調の高杯に飾るとお洒落感がぐーんとアップする（写真右）。

クラフト市で広がった植物と陶芸

現在はeloaを始め、他2店と取引する以外、埼玉を中心に茨城や栃木、群馬（前橋）など北関東圏内のクラフト市で活動している。なかでもお気に入りなのがアンティークや植物、クラフト作品を扱うIKINAマーケット主催の『フェルム・ド・フェスティバル』だという。

「私はクラフト作家という立ち位置で好きなマーケットに絞り、作家さん同士の横の交流も楽しんでいます。最近は鉢が縁でグリーン関係の方々と繋がり、実際に鉢の仕事のほうが増えているので、今後も鉢に注力していきたいと思っています」